

# 職場参加ニュース

## 障害のある人もない人も共に生きる職場・地域を



明けましておめでとうございます。昨年は、これまでの活動に加えて、越谷水辺の市や共同受注システム検討会への参加、そして越谷青年会議所とのおつきあいなど新たな関わりが増えました。また、市からの委託事業である就労支援センターでは、職場開拓や職場定着のための事業所訪問に力を注ぎ、就労者も増えています。

活動の広がりに伴い、数多くの方々大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。

今年も本部事業、委託事業を車の両輪として、共に働く街づくりを進めます。旧に倍する御厚誼のほど、よろしくお願い申し上げます。

NPO法人障害者の職場参加をすすめる会 代表理事 鈴木 操

## 共に働く職場— 調整・配慮・支援 の現在

### 共に働く街を創る つどい2014 (速報)



昨年12月14日、共に働く街を創るつどい2014を開催しました(上の写真)。冒頭、越谷市・高橋努市長からのメッセージ(代読)をいただいた後、パネルディスカッションを行いました。今年のテーマは、「共に働く職場—調整・配慮・支援の現在」。障害者権利条約の批准、障害者差別解消法、改正障害者雇用促進法の差別禁止・合理的配慮規定などについて、あちこちの職場で積み重ねられてきた経験や現在の動向をベースに考え合いました。異なる立場から多くの事例が示され、課題が具体的になったと思います。次頁から、その一部をお伝えします。

### 初春のイベントご案内



【世一緒映画会】1月15日(木)  
19:00～ 「フルモンティ」(イギリス・コメディ映画) 食事付きで300円。世一緒で 毎月第1か第2の木曜夜開催 問合せ: 世一緒まで



【第37回協働フェスタ】1月24日  
(土) 九時半～十五時半 市民団体・企業・行政の展示・体験。越谷市中央市民会館全館及び前庭で。



【越谷・水辺の市】2月10日(火) 十時～十五時  
野菜 乾物 ミートパイ お菓子 お弁当 日本茶 ケーキケータリング販売 民芸品 手作り小物 雑貨 リサイクル 他  
市役所東側の葛西用水ウツドデッキで  
主催・越谷にぎわいの会

# 共に働く職場—調整・配慮・支援の現在



冒頭、コーディネーターの朝日雅也さん（埼玉県立大学教授）からの提起：

普通の大学生の会話の中には、「日中活動」とか「一般就労」という言葉は出て来ない。障害者の世界では、「一般就労か福祉的就労か」という発想にとらわれてしまう。今日はこの閉ざされた世界だけでまかり通っている発想をこえて、「共に働く職場」というイメージを共有できるように語り合いを進めたい。

障害のある人が働くことについて、1月の障害者権利条約の批准、総合支援法、優先調達法、そして雇用促進法改正により精神障害者もカウントされるようになるなど、法整備が進んでいる。また、同法では、障害による差別の禁止、合理的配慮の提供義務がすべての雇用主に課せられる。ハローワークの窓口を見ても、10年前は全国で精神障害者は1万人だったのが、26年には6万5千人になり、働きたい精神障害者の数が伸びている、閉じこめられてきた状況が変わってきた。民間企業の雇用率は1.82%になっている。企業規模でいうと、千人以上の企業が2.05%。それ以下のところは低い数字にとどまっている。

だが、この国では雇用義務の対象にならない50人未満の企業でも障害者が働いてきた実績がある。今日は、数値目標を設定して強力に雇用を進めてゆく流れだけではない、地域で共に働き合っている実態を、いろいろな立場からお話して頂くことから始めたい。

地域には若者が少ないので、喜ばれている。もうひとつは障害者の母ちゃんたちの会。そもそも不況で工場閉鎖を断行した16年前、母ちゃんたちの強い懇願で縮小再スタートしたのだ。



靴加工工場仲間が軒並み何億の負債を抱え倒産する中、障害者の方が多小さな工場できぬいてきた(株)ニューオタニ。尾谷英一社長は、ためらいなく「障害者達は主力選手」と言い切る。では「配慮」は？と訊かれて、社長「ソフトボール」。

従業員だけでなくひきこもっている者も参加。そのほか、土曜日には読み書きその他の勉強会を、もう25年続けている。

ソフトボールや勉強会には、会社で働く障害者だけでなく、地域でひきこもっている障害者も参加する。ソフトボールは障害者のチームとしてだけでなく、地域の普通のチームにも加わっているし、町内会のまつりの机や椅子を運んだり、焼き鳥屋を出したりする。



世一緒や施設等のチームがグループワークとして働く水上公園の花壇整備作業を発注している公益財団法人埼玉県公園緑地協会本部の高橋一将さん。県立公園を活用して障害のある人たちに何かしら関わってもら

ことができないかというのが、事業の始まりだったと語る。仕事の範囲も年を追って増やしてきた。今年は車イスで作業しやすいプランターを、かなりの予算をかけて整備した。仕事のやり方については、そこに向か

うプロセスが大事で、いろいろな取り組みがあってもよいと考えているという。

前に職場で障害者を雇い入れた時、何が起るかわからないと思ったが、特になかった、先回りして対応することはしないと淡々と語る。グループワークとしては、いかに働きやすい環境を提供できるかということで力を入れているが、支援としてはとらえていないと語る。前の職場で障害者と共に働いてきた経験にも裏打ちされている。



聴覚障害者・松山美幸さんは、自宅では聴覚障害を意識しないのに、会社に行くと自分が障害者であると痛切に意識させられるという。前はメールが一般的でなくて、電車が遅れた時にメールで連絡したら、「メールはふざけているから電話でしろ」と言われ、できないからどうしたらいいかと言ったが、会社は電話連絡がなければ遅刻になると言われた。今はメールが普通になっていて、あの時の「ふざけている」というのはなんだったのだろうと思う。

平等だからと言われ、上司は口頭で説明するが、自分はわからない。口元を読み取ろうとしていると「何をにらんでいるの」と言われ、親しい同僚に確認していると、いつもこそそ何してると言われる。合理的配慮といっても、一般の人は知らないのだから、知ってもらうにはどうしたらいいか悩む。こちらの言うことはいつも同じことなので、「また言ってるよ」という反応になってしまう。こっちも「もうええわ」となって、なかなか解決できない。

いちいち確認するために紙にメモしていたら、後に同僚たちが手順を忘れて困った時、このメモが役に立ったという。お互いさまということになったらいいなと思ったと、松山さん。朝日さんは「大事なことは文書で出すということは会社のためにもなりますね」とコメント。

苦しかったけれど、働いてよかったと思うこともたくさんある。働く中で、本音で話せる、ママ友とはまったく違う友達が出来たという。



障害者就労支援に30年余携わってきた沖山稚子さんは、かつてある事業主が身寄りのない障害者をずっと雇ってきて、その人が高齢になり、亡くなって、無縁仏にするのも思ってお墓を用意したという話を聞き、そこまでやるのかと驚いた。研究部門に配属された時、高齢化した障害者に対する事業所の対応をテーマにして、調査を行った。事業所は何の配慮もしていないと言うのだが、根掘り葉掘り聞いて行くと壮絶なものがあった。たとえば、車イスの女性は、時々伸びをしないとだめなので、鉄棒みたいなものを机の所に設置して、時々身体を伸ばしている。箱折りの機械。指示線が付いていて、そこに物を入れると自動的に折れるので、片手だけで働ける。これらは作業に関するのだが、実際に展開されていた配慮は、就業支援者のことから、通勤、余暇にまで及んでいた。

前の職場では「雇用促進」が目的だったので、職場の外の生活部分は研究対象にならないと上から注意された、しかし、今地域に根差した就労支援センターで仕事をしていると、これらはとても大切なことがわかると沖山さんはふりかえる。いっぽう、加齢により能力が低下した人がその自覚が本人にも親にもなく、まだ働きたいと言い、他の従業員からクレームが来る、それでも粘り、訴訟になり、事業所として雇ったことを後悔する。そんなせめぎあいも想定して、就労支援機関としては円滑な職業生活の終りまで視野に入れる必要があると語る。

国のように好事例を集めて示すのも大事だが、やりすぎの事例も重要だ。たとえば仕事ができないと言って動かないのを、「障害者さんに注意していいのかわからない」と言って遠巻きにしているといった状況も見受ける、これでは周りもうんざりでもう障害者はこりごりということになると指摘する。

障害者には、障害のない人々もいろんな困りごとを抱えていることを伝えたいと語る。その上で、まずはこわいもの知らずで職場実習、就労にチャレンジしてゆこうと。



越谷市障害者就労支援センター所長の松尾晃史さんは、今年すでに71名が雇用されて、就職の伸びが著しいが、そのぶん長く働き続けられるようにしてゆく支援が人手不足になってゆく実感がある、またセンターを知らない隠れた人をそう支援してゆくのかというテーマもあると語る。

さらに、差別と配慮は表裏一体ではないかと指摘する。自身が植木屋で働いたとき親方が茶髪のやんちゃな子を一人前に育て上げていたことをふりかえり、ひきこもっていた知的障害の兄弟を二人で一人分の給料で週二日雇ってくれた小さな事業所と重ね合わせる。労働法規とは矛盾する場合もひっくりめ地域の事業所の懐の深さを語る。就労支援センターは必ずしも週5日・8時間をめざすのではなく、家から出て社会参加することを支援したいと語る。

さらに、差別と配慮は表裏一体ではないかと指摘する。自身が植木屋で働いたとき親方が茶髪のやんちゃな子を一人前に育て上げていたことをふりかえり、ひきこもっていた知的障害の兄弟を二人で一人分の給料で週二日雇ってくれた小さな事業所と重ね合わせる。労働法規とは矛盾する場合もひっくりめ地域の事業所の懐の深さを語る。就労支援センターは必ずしも週5日・8時間をめざすのではなく、家から出て社会参加することを支援したいと語る。



12月生まれの人へのプレゼントとして会場から二人が発言を許された。「片マヒのサラリーマン」が芸名と語る北澤誠さんは、31年働き続けているが、10年前に受傷し退院後主治医の反対を押し切って職場復帰した。「会社と家族が私をこき使ってくれたことが最良の配慮だった」と言う。期待してくれたことに対して、自分ができることを見せようとするのがモチベーションにつながった。配慮ということで実際には遠慮してしまうことが多いが、ある種のプレッシャーをかけてくれたことがよかったと語る。

会社と家族が私をこき使ってくれたことが最良の配慮だった」と言う。期待してくれたことに対して、自分ができることを見せようとするのがモチベーションにつながった。配慮ということで実際には遠慮してしまうことが多いが、ある種のプレッシャーをかけてくれたことがよかったと語る。



三郷市障害者就労支援センターの支援員・大野弘幸さんは、先日女性の聴覚障害者に同行支援のため女性専用車両に乗ったところ、冷たい視線にいたたまれなかった体験にふれ、社会がよかれと思って作っている制度が状況次第で冷たいものになると語る。

次第で冷たいものになると語る。



コメンテーターの越谷市障害福祉課・角屋亮副主幹は、市政世論調査でトップスリーは常に「防犯」、「防災」、「高齢者福祉」であり、「障害者福祉」は20位にも入らないと指摘するとともに、実は障害者・関係者自身も上記三つが最大関心事なのではないか、それ故に課としては三つの担当課の施策の中に障害者を位置付けるよう働きかけていると述べる。これもみんなが当事者という視点で、討論とつながる。

それ故に課としては三つの担当課の施策の中に障害者を位置付けるよう働きかけていると述べる。これもみんなが当事者という視点で、討論とつながる。



埼玉県障害者支援課・高山文子主幹は、今年度、優先調達推進法に基づいて、保健所、特別支援学校の清掃業務を障害者施設に随意契約した時、当初心配する声が多かったが始まってみれば苦情などまったくなく、いっぽう印刷物にミスがあったのを「やり直しをお願いしてもいいのか？」という問い合わせを受けたことがあると述べ、自分達が間に入らなくとも直接仕事をもらえるような関係が自然な形でできるようになればと語る。

自分達が間に入らなくとも直接仕事をもらえるような関係が自然な形でできるようになればと語る。



コーディネーターの埼玉県立大学教授・朝日雅也さんは、職場における合理的配慮の提供義務が法制化されていくと、各職場で議論されて行くだろうが、すべての職場でこういう場合はこうしようというのは難しいと述べる。

のは難しいと述べる。

障害者の側から見れば絶好の機会だから主張しなくてはいけないが、雇う側も過度の負担だからやれないと主張できる。そんな中で、外から見れば過度の負担とみなされるかもしれないが、地域の小さな職場で共に働き合う中で、〇〇さんがいなくなると全体が回らなくなるからやるという場合もある。その意味で、地域の小規模の事業所に頑張ってもらいたいと朝日さんは語る。

いま特別支援学校で100%就労を目指していたりして、特例子会社ができるのかなりの採用が見込め

るため、そこに流れ込んでゆく。かつてはほとんどが地域の中小企業に吸収されていた。そこでは戦力として育て上げてゆくことが前提であり、就職をするというのは正社員ということが常識だったと。

国は福祉施設から一般就労への移行の成果目標から就労継続支援 A 等を外し、就労移行支援だけを残した。雇用率をさらに高めるための支援に集中してゆこうとしているが、その支援のありがたが問われる。

知的障害者が生乾きの服を着て出社したため、臭くて困るので指導してもらえないかという連絡が、会社から就業・生活支援センターに入りいろいろ対応した

が、ほんとうは職場でやれば…と支援員が語っていたというエピソードを紹介。支援者のありがたとして、なんとかして就労を継続してほしいと思いがちだが、雇用主や職場の同僚が本人と向き合って一緒に考えてゆく機会を奪わないように心がける必要があると語る。職場・地域の文化を含めて考えてゆくことが大事だとまとめた。

(以上・要約の文責は当会)

パネルディスカッション終了後、当会としてまとめた「共に働く街をめざす自治体提言」を、会場で発表しました。その後いくつか修正を加え、下記の提言をもって近隣自治体首長との意見交換を進めています。

#### ① 子どもの時から一緒にいることが大事

社会に出たら競争であり、自分の力で生きなければならないということを理由に、障害児は小さい時から特別な配慮ができる別の場で教育を受け能力を伸ばすべきだと、教育委員会は勧めます。しかし、利潤を目的とする事業所であっても、時には採算に合うはずのない配慮までして障害者を雇い続けている例があります。本人と一緒に職場にいたからこそ、本人の気持ちや考えがわかり、もう少しここにいてほしいという思いにもつながったのです。障害のある子もない子も、子どもの時から一緒に学び、育ち合ったら、社会は大きく変わります。一緒に遊んだり、けんかしたりする中で、障害の有無とは関係なく、つきあい方を身に付けてゆきます。教育委員会の方針を見直すよう提言します。

#### ② 市役所内に共に働くためのモデル就労の場を

これまで国、自治体が民間に率先垂範して障害者の雇い入れを行う立場にあることを踏まえた施策の一環として、知的障害者等を一定期間非常勤採用し、経験を積んだ後、民間企業への就職の実現を図る「チャレンジ雇用」が行われてきました。しかし、現実の就労場面につながると思えない体験を長期間続けることで、かえって身の丈に合った就労機会から遠ざかってしまうという弊害を生じる事例もありました。また、安易で場当たりの雇用率充足とすら思われるケースも見受けられます。

しかし、チャレンジドオフィスちば、八王子市庁舎内ワークシェアリング、宇部市障害者就労ワークステーションなどでは、市役所内の多岐にわたる職場において、当該障害者たちに即した仕事の切り出し、働く上での調整や配慮、それらを踏まえた民間事業所への就労及び定着の支援という一連の試みと評価を行う場を設置し、成果を上げています。貴市においても、これらの先行例を参考に、これまでのチャレンジ雇用の分析・検討も踏まえ、関係機関等と連携し、市役所職場だからこそできるノウハウやヒントを蓄積し、本人、事業所を包含した共に働く地域づくりを支援する場を設置されるよう提言します。

#### ③ 優先調達推進法を機とした役務の提供と共同窓口への支援

障害の重い人達の多くが福祉施設や病院等を利用しているか、家にこもることを余儀なくされています。施設職員の支援や家族の世話を受けて暮らす日々の中から、時には施設職員や介助者と数名～1名の障害者がユニットを組んで社会に参加する機会として、自治体等による役務の発注を生かす必要があります。施設等が共同の窓口を作り、受注する仕事に応じてユニットを組み合わせ、作業の総合調整を行う体制が必要です。散歩や買物だけでなく、社会的役割を担うことにより、本人も支援者も地域への参加の仕方を工夫できます。地域の側も受け入れ方を工夫できます。自治体・地域の側から、施設等の支援を導き入れる水路をつくることを提言します。

#### ④ ピアサポートによる就労支援活動の育成・支援

障害者の就労支援は、就職支援にとどまらず、本人と同僚、上司、事業主、さらには家庭や地域での相互関係の支援を含みます。このために通常、関係機関相互の連携が必要とされますが、併せて必要なことがピアサポートによる就労支援です。専門的な支援の網からこぼれ落ちてしまう本人も忘れていた体験、抑えてきた思いなどが、同様な立場にある障害者と一緒に語り合い、活動に関わることを通して共有されます。世一緒の例では、仕事の失敗、お金、相談相手、支援の利用法、職場実習、コミュニケーション、異性、介助、アルバイトなど、多岐にわたる研究、実践をしています。なかなか就労できない人、離職後の方向が定まらない人の場合、障害福祉サービスや訓練機関などの利用が勧められますが、ピアサポートによる就労支援も選択肢となりうるよう、公的な育成・支援の検討を提言します。

#### ⑤ 社会的排除をこえて共に働く事業所を含む仕事起こし、地域おこしへの支援

障害の重い人達の社会参加にとって役割をもつことが重要であることを③で述べ、障害者の就労支援が周りの人々や地域との相互関係まで含めたトータルな支援を必要としており、かつ本人たち自身による相互支援が必要なことを④で述べました。いまの地域を見渡すと、これらのことは、ひきこもりの若者、シングルマザーやシングルファーザー、生活困窮者、認知症の高齢者、時には外国人等にも共通しています。ともすれば排除に追い込まれてゆく人々が、地域で共に生きよう、共に生きる地域を創り出したいとの思いを込めて取り組んでいる仕事おこしについて、法制度の分断をこえる工夫を含めて、多角的な支援の検討が必要です。

#### ⑥ 障害福祉計画・障害者計画に反映させること

上記の事項に関し、貴市において障害福祉計画や障害者計画、地域福祉計画の見直し時に、反映させられるよう提言します。これらの計画が支援の対象者のみを当事者に位置づけ、その枠組みの中だけで自己完結しないよう、すべての市民がこれらの事項の当事者であることを認識できるよう、関連計画への取り込みを強く期待します。

## 職場・地域ひろがり つつしん



### 越谷・水辺の市 毎月第2火曜に 世一緒スタッフたちが裏方で

市役所東側の葛西用水沿いに設置されたウッドデッキで始まった越谷・水辺の市。冬に入っても、12月、1月と、第2火曜日に続けられてきた。この水辺の市は、市民団体、個人と地元食品加工会社、商店などが、昔の楽市のようなごちゃごちゃしたにぎわいの場をめざして始めた。火曜日は世一緒の活動は手薄な日なので、店を出していないが、当番など数人で、机、イスを運んだり、チラシを配ったり、裏方として関わっている。写真は、1月13日の水辺の市。駅からの大通り沿いまでウッドデッキが広がり、これまでより店が目立つようになった。



### 越谷市高橋市長に提言 共に働く街めざし1時間意見交換

昨年暮の「共に働く街を創るつどい2014」を踏まえ、会として近隣市の市長に6項目の提言を行うことになっている。そのトップを切って、1月14日に越谷市高橋市長に提言書を本会山崎理事より手渡し（写真）、武藤副市長ほか市幹部をまじえ意見交換を行った。参加者の中には、市役所や出先機関他の職場で施設職員等の支援を受けながら実習する地域適応支援事業を体験した人たちもいて、ぜひまたやりたいと語った。実習を踏まえさらに有給で仕事したいという声を受けて、市長からは「この仕事をこんな形でならできるといった具体的な提案をぜひ出してほしい」との前向きな回答があった。



### 仕事発見ミッション

#### 細く長く続けています

世一緒が始まって3年目、そう長くは続けられないだろうと思いながら試みた「仕事発見ミッション」は、いまでもサポーターが複数いる月、水の午後、他に活動がない時にやっている（写真）。就労準備中の二人がペアを組み、チラシをもって商店街等を飛び込み訪問。短時間の職場体験をさせていただけないかをお願いする。サポーターは、外で待機し、記録役に徹する。コミュニケーションが苦手な人が多いので、すぐめげると思いきや、交替で主役を務める緊張感が楽しみになるようだ。体験ができるのは、数十件飛び込んで1件位。2月には、2ヶ所のコンビニで品出しなどを各1時間ほど体験させて頂く予定になっている。



### 再開した世一緒映画会

#### 仕事帰りに夕食付きで

発足当時の世一緒は生活支援センター等のつながりで生活に困窮している者も多かったため、安く食べられる冷凍食を用意したり、夕食付きで映画会をしていた。就労支援センター元所長が、用意していたが、仕事場が変わり中断していた。その夕食付き映画会が、昨年9月から復活している。毎月第1か第2の木曜夜19:00頃から開くので、仕事を終えて家に帰る途中で、夕食とおしゃべりを兼ねて立ち寄れる場になっている。久しぶりに元所長が来て用意してくれている。映画の選定もお任せだが、秋から冬にかけては炭鉱シリーズ。写真は、故高倉健さんの「幸せの黄色いハンカチ」上映風景。

## 職場・地域ひろがり つうしん



### 水上公園作業に多数の施設が参加 花いっぱいの春に向けて働く

しらこぼと水上公園のグループワークは、毎年春～初夏と秋～初冬が繁忙期。9～11月は秋の花を補い、冬を越して春に満開になるパンジー、ビオラを植え付けた。就労支援センター相談者が主力の世一緒スタッフたちのほか、生活支援センター(1)、就労継続A(1)、生活介護(3)、院内デイケア(2)、入所施設(3)といったさまざまな施設から利用者と職員が多数参加した。( )内は施設数。花苗は放置しておけないので、時には小雨でも働いた(写真)。植え付け完了から2ヶ月弱、正月明けに世一緒スタッフで施肥を行った。なお、このほか、年間を通しての水やりは、現場に近い2つの就労継続B施設が担当している。

受注と総合調整は当会で行っているが、世一緒や各施設の中に臨機応変に動けるメンバーが育ってきたことと、発注元の埼玉県公園緑地協会の全面的なご協力により、多くの施設のコラボが支えられている。



### こしがや産業フェスタ 2014 世一緒スタッフがPRと販売

写真は、11月29、30日、越谷市総合体育館で開催されたこしがや産業フェスタ2014での当会ブース風景。厚岸昆布や院内デイケアの手作りクッキー、リサイクル衣料などを販売しながら活動をPRした。ステージでのアピールも行った。

当会は越谷市商工会、越谷法人会に加盟している。物を作ったり売ったりすることがメインの事業所ではなく、障害者が働くことをテーマとする会だ。就労支援サービスの提供はしているが、サービス事業を拡大展開する方向はめざしていない。地域・自治体に対し、一つのモデルを提示し、バトンタッチしてゆきたいと志している。だが、働くためには仕事がなくはならず、仕事が豊かにある地域がなくはならない。だから、障害の有無をこえて、共に働く仕事・地域を一緒に創ってゆきたい。そのために、法人設立以来、産業フェスタにブースをもって参加している。

今回は埼玉東部工業展も同時開催され、越谷の障害者が働いている事業所のブースもあった。重い病気の人たちもできる仕事を開発し「1分給(時給でなく)」を提唱する北澤さんのブースも。伝統工芸の事業者さんたちとも少しずつ顔なじみになってきた。一緒に考え、動く輪がさらに広がることをねがう。

## NPO 法人障害者の職場参加をすすめる会

### 本部 事業

職場参加の基盤形成事業 (世一緒の運営)  
福祉施設等との連携事業 (グループワーク)  
情報提供事業 (職場参加ニュース)  
勉強会開催事業 (共に働く街を創るつどい)  
自治体への提言事業 (近隣市長への提言)  
協力事業所開拓事業 (商工会等への参加)

### 委託 事業

越谷市障害者就労支援事業 (就労支援センター)  
センターは市産業雇用支援センター3F (ハローワークの上の階)。「就労支援センター通信」を年4回発行。

共に働く  
街づくり

ピアサポ  
ート、事業所  
支援など

就労支援

# 世一緒 スタッフ日記



世一緒スタッフは主に就労支援センター利用者で、ピアサポート（仲間同士の支援）を希望した人です。サポーター（非常勤やボランティア）の支えを受けて、世一緒の当番（ピアサポート実習）や仕事発見ミッション（事業所訪問）、グループワーク等を希望により行っています。今回の筆者はみな越谷市民ですが、他市の人も参加できます。

## 八王子ワークセンター報告

富樫 千亜紀

私は昨年ワークセンターに行き、朝8時30分までに越谷駅西口のロータリーに集合し車2台で行きました。新しい圏央道を走って3時間かかっちゃいました。

ワークセンターのかてかてに行つて見学したら知的障害者、精神障害者の方がいて、バッグとか、しおりなど絵を書いたりして、車で移動しながら昼食はランチを食べました。暑いから飲み物を飲んで移動、市役所がなぜ中核市になっちゃって中も拝見しました。いろいろ市役所の中は広くてビックリした。売店はずちはものすごくよかったです。その後ワークシェアリングで市役所の中で働いているのを見ました。車で移動して、ゴミの分別作業をやっているところに行き、中に入ると食べ物臭いや注射針が置いてあったり危険なものとか、ふつうのストパーマーケット売ってるレトルトだとか発酵スチロールやペットボトルがありました。生ゴミの処理も大変そうだった。

交流会で前のプレハブの時より前働いてた方と新しい方が2名と清掃員が1人いた。少し障害をもつていて、しゃべり方がうまく言える人もいたり照れ屋さんもいた。地元の方

がほとんどいて、交流を深まってくれました。私が思ったのはゴミの分別作業で八王子と越谷市のやり方の分別作業は大変そうに思いました。あとは交流会で職場参加でどういう事やっているのか？と質問されたところ世一緒の活動、日替わり当番グループワークの話を話したら向こうの方がわかってくれたのでよかったです。

帰りは少し遅くなっちゃったけど車の中の移動は大変でした。市役所の中の売店では中が広くて食べ物や飲み物をたくさん買ってしまいました。4年前のワークシェアリングとまた違っていてビックリしちゃった。人がやさしい人に対応できる障害を持っていてるか私たちと交流会ができてよかったです。また何年後に行けるか楽しみにしています。よろしくお願いします。

## 家の手伝いをしながら仕事を

佐藤 秀一

僕は仕事を見つけないが世一緒をやっています。

今、僕は家で家の手伝いをしながら仕事をみつけたほうがいいと思える。いろいろな手伝いをお願いしたいと思う。家では手伝いはお米をとい

り、雨戸のあけしめをやっています。普段は病院をよって、市立病院にいつてヘルパーさんがお出かけに連れていってくれます。

## 昨年いろいろありました

新井 里佳

昨年は、なかなか大変なことはいろいろとありました。でも、来年にむけてのいろいろなことを頑張ろうと思えました。手話会、覚えようとして、いろんなことにかかしていいことと思っています。橋本克己さんの買い物、むかえにいくのを始められたよかったです。

昨年は、キッサをはじめると話があり、いつはじまるのかと思えました。

中学のころの同じ田沢麻衣さんと会えてうれしかったです。又、話すようになりまし。

友野さんの介助ではいろいろなことがあり、カギザキさんなどと一緒やっています。サンドイッチはだんだんつくれるようになりました。

佐藤良子さんは、良子さんのお母さんとは、たまに会います。あいさつはしています。今年、あいさつをきちんとしようと思っています。

人と会ったら、あいさつをきちんとすることが大切だと思えました。

## スタッフではありませんが

北澤 誠

みなさん、こんにちは！ 越谷の北澤（56歳）です。10年前に脳卒中で倒れ、リハビリとして以前からの趣味のジオラマ作りを介護施設の有志と行っています。今回の作品は昭和40年代の東京を走った都電を印象の深い3か所の情景を1枚のボード上に再現したものです。

(1) 銀座 (2) 浅草 (3) 神谷町 (1) 4丁目交差点から数寄屋を望みます。三愛ビル、和光、ビクタリーや森永キャラメルの広告塔や風に揺れる柳もあの頃の思い出。1/150の世界で銀ブラを楽しんでください。(2) 浅草寺の雷門まえも都電が往来していました。いくつかの大提灯は仲見世で売られていたキーホルダーです。(3) 神谷町は東京タワーのふもとの街です。六本木や新橋に近く、今は都会ですがこのころは下町情緒の残る自転車の似合う街でした。

ジオラマはさいたま市内の介護施設で手先のリハビリ兼リクレーションとして取り組んだもので、出来上がるとおじいちゃん、おばあちゃんがこれを楽しんでお茶を飲みながら回顧して楽しんでます。(後略)

お問い合わせは 北澤 090-3401-5291 (北澤さんは片マヒで大企業の現役サラリーマン)

## NPO法人障害者の職場参加をすすめる会

〒344-0023 埼玉県越谷市東越谷 1-1-7 須賀ビル 101 世一緒内 (ハローワーク斜向かい)  
048-964-1819 (fax 共) shokuba@deluxe.ocn.ne.jp http://www5b.biglobe.ne.jp/~yellow/